



探究活動の成果を発表する釜石高校3年の生徒たち

8月9日 【釜石市民ホールTETTO】

戦没者追悼・平和祈念式 平和への思いを次世代へ継承

太平洋戦争をはじめ過去の戦争で犠牲となられた戦没者・戦災殉難者の御霊をお慰めし、再び戦禍を繰り返すことのないよう、恒久平和の確立を祈念し、式典が執り行われました。式典では、釜石高校3年の生徒3人が艦砲射撃をテーマとした探究活動の成果を発表しました。平和学習で交流している青森市と釜石市の中学生計20人も祭壇に献花し、戦争の記憶を次世代に継承していく活動が重要であることを再確認しました。



ノリノリのダンスを披露する正福寺幼稚園の園児たち

8月10日 【大町周辺】

ぜひとも一度はおいでんせ 食と音楽で地域を盛り上げ

中心市街地のにぎわいを創り出すイベント「かまいし夜市おいでんせ」が開催されました。市民ホールTETTO前広場には、飲食店など16の業者・団体が屋台や販売ブースを並べました。大町広場では、虎舞やバンド演奏、園児のダンスなどが繰り広げられました。イオンタウン釜石駐車場での「超！盆BON踊り」では、盆踊りの定番曲の他、「好きすぎて滅」など若者に聞きなじみのある曲も流し、小さな子どもから高齢者まで幅広い年代が楽しめました。



釜石地方森林組合に交付書と表示証を授与

8月18日 【釜石地方森林組合】

消防団協力事業所に認定 地域の防災力向上へ

市は、就業時間中の消防団活動について積極的に配慮し、災害時に資機材提供などを行う事業所を「消防団協力事業所」として認定しており、このほど釜石地方森林組合を認定しました。同組合では、職員の消防団活動に理解を示し、災害時には所有する資機材などを提供しています。昨年、本年と近隣自治体で大規模山林火災が発生し、消防団の重要性が再認識されている中、今回の認定が若い団員の増加につながるよう期待されます。



納涼盆踊りを楽しむ地域の皆さん

8月22日 【うのすまい・トモス】

鵜住居商店会納涼盆踊り 地域のつながりを生むシンボルイベント

鵜住居商店会主催の納涼盆踊り大会が、うのすまい・トモスで開催され、地元住民の他、市内外からの多くの来場者でにぎわいました。全国大会に出場した少年野球チーム「釜石野球団 Jr」と「栗林ラビーバレーボールスポーツ少年団」の団員約50人も、支援へのお礼と凱旋報告を兼ね団体参加しイベントを盛り上げました。同イベントは、今年で5回目の開催。東日本大震災で甚大な被害を受けた鵜住居に新たな地域のつながりが生まれています。

7月27日 【市長室】

片岸公園が自然共生サイトに認定

片岸公園が、国の自然共生サイトに認定され、認定証が授与されました。東日本大震災で壊滅的な被害を受けた鵜住居川の「みのすけ沼」は、片岸公園として新たに整備されました。今回の認定は、震災復興事業として、地域の自然を残そうとした取り組みであることや、地域の多様な主体と連携して行う片岸公園保全活動実施計画が評価されたものです。今後も、地域の皆さん、関係団体と一層連携・協力しながら、片岸公園が生物多様性の保全を図る場所となるよう取り組んでいきます。



釜石市と鵜がまいしDMCに認定証を授与

7月30日 【郷土資料館】

『釜石・艦砲射撃の記憶』 アニメーションDVD贈呈式

北銀ひまわり会の庄司忠良会長から市教育委員会の高橋勝教育長へDVDが贈呈されました。このDVDは、1945年7月14日と8月9日の艦砲射撃を広く伝えるため、体験者の庄司会長を中心に初めてアニメとして制作され、会長の「戦争の悲惨さを伝え、平和を考えるきっかけに」との願いが込められています。映像は市内各小学校に配布された他、郷土資料館で常時公開しています。世代を超えて歴史を分かりやすく継承する、新たな平和学習の教材として期待されます。



アニメを見ながら説明する庄司会長

8月6日 【魚市場】

秋味さんまを求め 大型さんま船が出港

濱幸水産(株)が所有する大型さんま棒受け網漁船3隻が、今年のさんま漁に出港しました。約50人の乗組員を前に、濱川社長は「経費は上がっているが、それを上回る水揚げで乗り越えていこう!」と力強く激励。大豊漁と航海の安全、乗組員の健康を祈りながら、家族や関係者が色とりどりのテープを握りしめながら旗を大きく振り「頑張って」と岸壁から見送りました。秋の大豊漁が待たれます。



家族らに見送られ出港するさんま船

8月8日 【根浜海岸】

障がいがあってもなくても みんなで夏を、海を楽しもう！

認定NPO法人Plus One Happinessが主催する「三陸ユニバーサルビーチプロジェクト」が根浜海岸で行われました。障がいの有無にかかわらず砂浜を自由に移動できるよう、専用マットや水陸両用車イスを用意し、障がい児とその家族らが、スタッフや医師、看護師などのサポートを受け、海遊びを楽しみました。当たり前のように思える「やりたい」でも、障がいがあることで実現が難しいことを「できる」に変える事業を展開しています。



水陸両用車イスで初めての海水浴に挑戦